

2023. 2. 19 (日) 使徒7:17~29

7:17 さて、神がアブラハムになされた約束の時が近づくにしたいが、民はエジプトで大いに数が増え、

7:18 ヨセフのことを知らない別の王がエジプトに起こる時まで続きました。

7:19 この王は、私たちの同胞に対して策略をめぐらし、私たちの先祖たちを苦しめて幼子を捨てさせ、生かしておけないようにしました。

7:20 モーセが生まれたのは、このような時でした。彼は神の目にかなった、かわいい子で、三か月の間、父の家で育てられましたが、

7:21 ついに捨てられたのをファラオの娘が拾い上げ、自分の子として育てました。

7:22 モーセは、エジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、ことばにも行いにも力がありました。

7:23 モーセが四十歳になったとき、自分の同胞であるイスラエルの子らを顧みる思いが、その心に起こりました。

7:24 そして、同胞の一人が虐待されているのを見て、その人をかばい、エジプト人を打ち殺して、ひどい目にあってきた人のために仕返しをしました。

7:25 モーセは、自分の手によって神が同胞に救いを与えようとしておられることを、皆が理解してくれるものと思っていましたが、彼らは理解しませんでした。

7:26 翌日、モーセは同胞たちが争っているところに現れ、和解させようとして言いました。『あなたがたは兄弟だ。どうして互いに傷つけ合うのか。』

7:27 すると、隣人を傷つけていた者が、モーセを押しつけながら言いました。『だれがおまえを、指導者やさばき人として私たちの上に任命したのか。』

7:28 昨日エジプト人を殺したように、私も殺すつもりか。』

7:29 このことばを聞いたモーセは逃げて、ミディアンで寄留者となり、そこで男の子を二人もうけました。

<説教>

「ステパノはモーセと神を冒瀆している。神の神殿とモーセの律法に逆らっている。」との不当で悪意に満ちた訴えに対するステパノの最高法院での裁判における真実な証言、説教が続きます。栄光の神がアブラハムに現れてお召しになったことから始めて、その神がアブラハムに与えてくださったすばらしい約束について、聖書に基づいてステパノは語りました。そして兄弟たちに妬まれエジプトに売り飛ばされたヨセフを神が用いて、ヤコブ以下アブラハムの子孫たちが滅びないようにお救いになったことを語りました。そのようにしてステパノは神が自分たちの歴史をすべて導いておられる主、主人公、主権者であることを証しし、神を崇め、神に栄光を帰したのです。

ステパノは続けてそのように神に栄光を帰しつつ、モーセについて語り始めます。そのことによって、自分がモーセを冒瀆しているとの訴えに反論し、冒瀆どころではない、自分は聖書に基づいてモーセのことを正しく理解していることをこれから証言します。また、自分が神の神殿とモーセの律法に逆らっているのではなく、逆らっているのは自分を訴えているユダヤ人民衆と最高法院の人々だと逆にこれから訴えることとなります。

ステパノはまずモーセの生涯の初めの 40 年について語ります（それは出エジプト 1:7-2:22 に相当します）。〈さて、神がアブラハムになされた約束の 때가 近づくにしたいが、民はエジプトで大いに数が増え、ヨセフのことを知らない別の王がエジプトに起こる時まで続きました。〉(7:17-18)とステパノは言います。〈神がアブラハムになされた約束〉とは、5-7 節に記されている約束のことです。アブラハム、イサクにも約束の地は与えられず、ましてやヤコブに至っては約束の地どころか、エジプトという異国に移り住むことになっていました。そしてヤコブもヨセフたちもエジプトで死にました。もちろん彼らはそれでも神に対する信仰を失うことはありませんでしたが、それでも出エジプトに至るまで〈四百年の間〉(6)も神の約束の成るのを待つというのは大変なことです。しかし真の神を信じる信仰には、その神の約束が必ず成ることを信じて「待つ」という面、そういう神の訓練が必ずあるということをおぼわされます。さて、それにしても神の約束が成るためにはエジプトを出なければなりません。そしてその前に、神がアブラハムに言われたとおりに、イスラエルの民がエジプトで奴隷として苦しめられるということが起きました。ヨセフの多大な功績、恩義を知らない王の代になると、大いに数が増えたイスラエルの民をエジプトは脅威と見なすようになります（出エジプト 1:8-10）。

それで、〈この王は、私たちの同胞に対して策略をめぐらし、私たちの先祖たちを苦しめて幼子を捨てさせ、生かしておけないようにしました。〉(19)（出エジプト 1:11-22）再びイスラエルの民に存亡の危機が訪れました。しかし神はここでご自身の〈目になかった〉モーセを生まれさせます。〈モーセが生まれたのは、このような時でした。彼は神の目になかった、かわいい子で、三か月の間、父の家で育てられましたが、ついに捨てられたのをファラオの娘が拾い上げ、自分の子として育てました。〉(20-21)（出エジプト 2:1-10）この出来事は、救い主イエスがお生まれになったあと、ヘロデ王にいのちを狙われてエジプトに行かなければならなかったこととよく似ています。モーセも〈神の目になかった〉者としてやがてイスラエルの民をエジプトから救うべく生まれましたが、いのちの危険の中でエジプトの王女の子となりました。そのようにして、モーセはエジプト王の娘の子として、将来エジプトの指導者となるために〈エジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、ことばにも行いにも力があ〉る(22)人となりました。それほどになるには 40 年くらいはかかったのでしょうか。もちろん、神がそういうモーセをお用いになろうと、そこまで守り育て、エジプトをも用いて教育してくださったのです。やがて「モーセ五書」を記すための文章力もこの間に相当鍛えられたことでしょう。ですから、「この世の」学問をする機会が与えられている人は（殊に児童、学生の皆さん）その機会を十分に生かして一所懸命に勉強しましょう。それを将来（もちろん今からでもですが）聖書を正しく読み、理解するために、そして神と人を愛し、神と人に仕えるために（単なる成績とか高い地位や金儲けのためにではなく）よく用いるようにしましょう。

さて、そういう〈モーセが四十歳になったとき、自分の同胞であるイスラエルの子らを顧みる思いが、その心に起こりました。〉(23) 神がその思いをモーセの心に与え、起こさせてくださったのです。後にヘブル書記者も言います。〈信仰によって、モーセは成人したときに、ファラオの娘の息子と呼ばれることを拒み、はかない罪の楽しみにふけるよりも、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。彼は、キリストのゆえに受ける辱めを、エジプトの宝にまさる大きな富と考えました。それは、与えられる報いから目

を離さなかったからでした。) (ヘブル 11:24-26) と。この信仰による歩みは、後で見るようにシナイの荒野でもっと直接的な神の召しを受けてからますます強くなったと思いますが、この四十歳のときに始まったことは間違いないでしょう。このモーセの歩みもまた、およそ 30 歳で公の働きを始められたイエスの、また、羊飼いのいない羊の群れのように弱り果てて倒れていた群衆を見て深くあわれまれたようなイエスの歩みとよく似ています。そしてそのような人々を〈顧みる思い〉、〈救いを与えよう〉という思いと行動がその相手から理解されず、受け入れられず、拒絶されたというところまでそっくりでした。

〈モーセは、自分の手によって神が同胞に救いを与えようとしておられることを、皆が理解してくれるものと思っていましたが、彼らは理解しませんでした。〉 (25) また、〈すると、隣人を傷つけていた者が、モーセを押しつけながら言いました。『だれがおまえを、指導者やさばき人として私たちの上に任命したのか。昨日エジプト人を殺したように、私も殺すつもりか。』〉 (28) このようにしてステパノは、すでにヨセフに対するイスラエルの民の罪を指摘していましたが、続けてモーセの思いと助けを理解せず、拒んだイスラエルの民の罪を指摘しました。そのことによってステパノは、モーセにも遙かに増して〈自分たちの同胞であるイスラエルの子らを顧み〉てくださり、〈自分の手によって神が同胞に救いを与えようとしておられる〉ことをお教えになった主イエスを〈押しつけ〉て従わず、拒絶して十字架につけて殺した今のイスラエルの民の罪を鋭く告発したのもありました。モーセをミディアンの荒野に追いやった(29)イスラエルの民は主エジプトという救いが 40 年先延ばしになりました。

確かにモーセにも (その点はイエスとは違って) まだまだ未熟な面があったのも事実でしょう。自分は神に従って語り行ったことが同胞から理解されず、強く拒否されたことで少なからずがっかりもしたことでしょう。しかしそのことを通して神はモーセに一層の謙遜、へりくだりの必要をお教えになったのではないのでしょうか。エジプトの王女の息子という高い地位からおろし、〈寄留者〉として、ますます神だけに頼る歩みへとモーセを進ませたのもモーセを召し、お用いになろうという神の豊かな顧み、あわれみのゆえでした。